

資料

高等学校国語教科書における小説掲載の問題点

——教科書での抜粋状況の調査——

鶴見 祐介

1. はじめに

国語の教科書においては、小説を掲載する際に、小説の分量によっては、一部を抜粋して掲載している場合がある。教科書のページ数などの制限上、長編の小説を一部抜粋して掲載することは仕方ないことではある。しかし、その教科書を使って学習する生徒は、抜粋された小説を読み、作品の理解に関して誤った理解をしてしまう可能性がある。本稿ではこの問題に関し、教科書が小説を全文掲載しているのか、一部抜粋で掲載しているのか調査することにより、現在の教科書が抱える問題点を提示する。

小説の抜粋に関して、夏目漱石の作品に関して教科書の掲載状況を調査し、抜粋の問題を論じたものとして塚田(1974)がある。しかし、教科書に掲載されている作品を包括的に調査した研究は見受けられない。本稿では、教科書の掲載作品を包括的に調査することにより、小説の掲載をめぐる問題点を提示する。研究の対象は、第二次世界大戦以降に発行された高等学校用の国語教科書である。戦後からの歴史的な経緯を全体的に踏まえて考察することによって、現在の教科書の抱える問題点を浮かび上がらせていく。

2. 調査の対象及び方法

本稿における調査の対象は、昭和23(1948)年から平成26(2014)年に発行された、高等学校用現代文の教科書である。対象となる教科書はすべて筑波大図書館に所蔵されており、これを調査した。調査した教科書の総数は152冊であり、調査は以下の方法で行った。

- ①教科書のタイトル、印刷・発行の日付、主たる著作者、発行者を記録する。
- ②教科書に掲載されている小説のタイトル、作者、掲載されているページの分量、掲載されているページ(教科書のページ番号)を記録する。
- ③教科書に掲載されている部分の始まりの1文、終わりの1文を記録する。
- ④教科書の掲載部分に目を通し、途中で省略部分がないか確認する。
- ⑤教科書に掲載されている出典、もしくは作者の全集等で、教科書掲載部分が全文であるのか、一部抜粋されたものであるのか確認し、記録する。

調査結果は、次ページの調査票の形式を用いて集計した。どの作品を小説として分類するのかについては、教科書にて施されている分類をそのまま利用した。なお、本調査において、⑤の確

認作業で、谷川俊太郎『墜ちた男』、黒井千次『夜のぬいぐるみ』、内海隆一郎『待合室』、藤沢修平『おぼろ月』、アゴタ＝クリストフ『家』の5作品について、出典および全集等での確認ができなかったため、分析対象から除外した。

教科書掲載状況調査票 形式と入力例
(昭和30年発行 中教出版 高等国語 総合編 一年上の場合)

タイトル	
高等国語 総合編	一年上
印刷	昭和 30 年 6 月 1 日
発行	昭和 30 年 6 月 5 日
著作者	時枝誠記 他
発行者	中教出版株式会社

分類	タイトル	筆者/作者	ページ数	ページ	備考	掲載状況
小説	安井夫人	森嶋外	19	49~67		一部抜粋
始	「仲平さんはえらくなりさるだろう。」と言う評判と同時に、「仲平さんはぶ男だ。」という陰言が、清武一郷に伝えられている。					
終	その望みの対象をば、あるいは何物ともしかと弁識していなかったのではあるまいか。					

小説	清兵衛と瓢箪	志賀直哉	8	83~90		全文掲載
始	清兵衛が時々瓢箪を買って来るとは両親も知っていた。					
終	しかし彼の父はもうそろそろ彼の絵をかくことにも小言を言い出して来た。					

小説	断崖	徳書蘆花	6	90~95		全文掲載
始	某の小洞より某の漁村に通ふ一条の間道あり。					
終	ああ、わがわがきのふ立ちしか、これわが一生の断崖にたちしにはあらざるか。					

3. 調査結果の分析

調査結果を元に、抜粋に関する傾向の変化を分析するために、表1を作成した。表1、1年ごとに、その年に発行された教科書に掲載されている小説に関し、全文掲載の作品の割合を計算し、表化したものである。データを得られなかった年に関しては、ハイフンを入力している。

表1 各年の小説の全文掲載の割合

西暦	全文掲載の割合(%)	西暦	全文掲載の割合(%)	西暦	全文掲載の割合(%)	西暦	全文掲載の割合(%)
1948	100	1965	60	1982	100	1999	83
1949	44	1966	-	1983	73	2000	80
1950	100	1967	-	1984	75	2001	-
1951	-	1968	-	1985	-	2002	-
1952	40	1969	65	1986	-	2003	67
1953	20	1970	25	1987	67	2004	-
1954	43	1971	25	1988	60	2005	-
1955	35	1972	70	1989	80	2006	-
1956	22	1973	-	1990	77	2007	-
1957	-	1974	-	1991	40	2008	80
1958	-	1975	-	1992	57	2009	60
1959	33	1976	75	1993	57	2010	-
1960	42	1977	80	1994	-	2011	-
1961	-	1978	60	1995	50	2012	-
1962	40	1979	-	1996	-	2013	92
1963	50	1980	-	1997	-	2014	85
1964	45	1981	-	1998	-		

表1を見ると、各年に発行された教科書において、全文掲載の作品が、掲載作品全体の中でどの程度の割合存在しているのか分かる。教科書によって違いはあるものの、大部分の教科書は小説の掲載に際し、全文掲載と一部抜粋の掲載の両方の掲載方法を用いている。1冊の教科書ではなく、その年に発行された複数の教科書における全文掲載の割合を出すことにより、教科書の全体的な傾向を見ようとしている。

表1をもとに、経年による変化を観察するため、図1のグラフを作成した。グラフ化に際し、縦軸に全文掲載の割合(%)、横軸に西暦(年)をとった。

図1から、1948(昭和23)年頃から1956(昭和31)年頃の間、教科書における小説の全文掲載の割合が減少傾向にあることが分かる。また、1959(昭和34)年頃から1982(昭和57)年頃の間では、この割合が増加傾向に転じている。しかし1983(昭和58)年頃から1995(平成7)年頃の間では、再び小説の全文掲載の割合は減少傾向に転じている。

1999(平成11)年頃から2014(平成26)年頃にかけては、全文掲載の割合は増加傾向にある。

このように、教科書における小説の掲載状況においては、全文掲載の割合が10年から20年の周期で増加と減少を繰り返していることが分かる。この周期的変化を分かりやすくするために、10

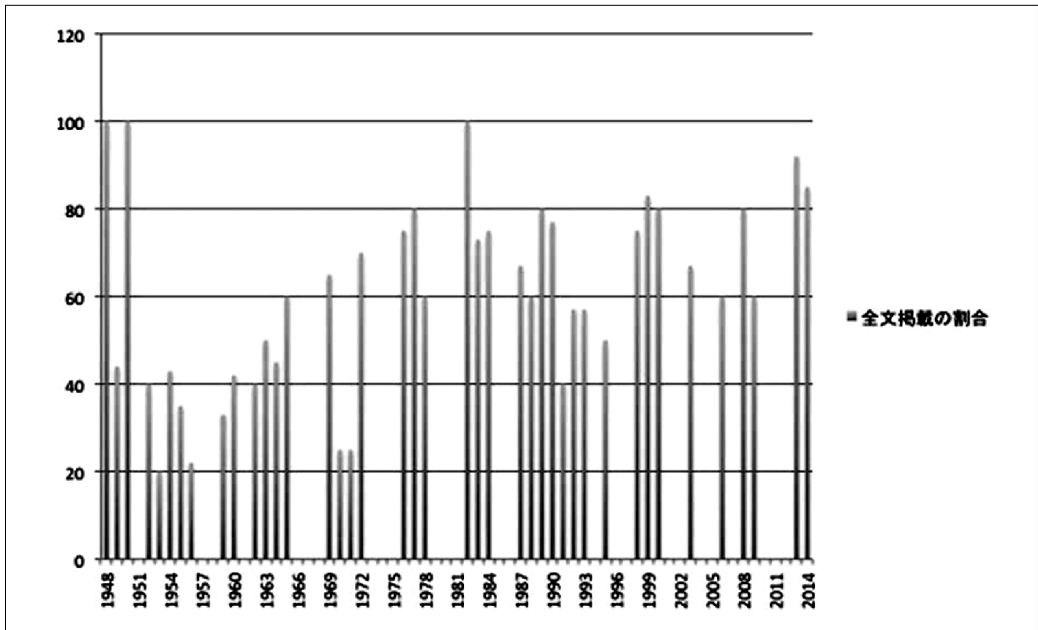


図1 全文掲載の割合変化

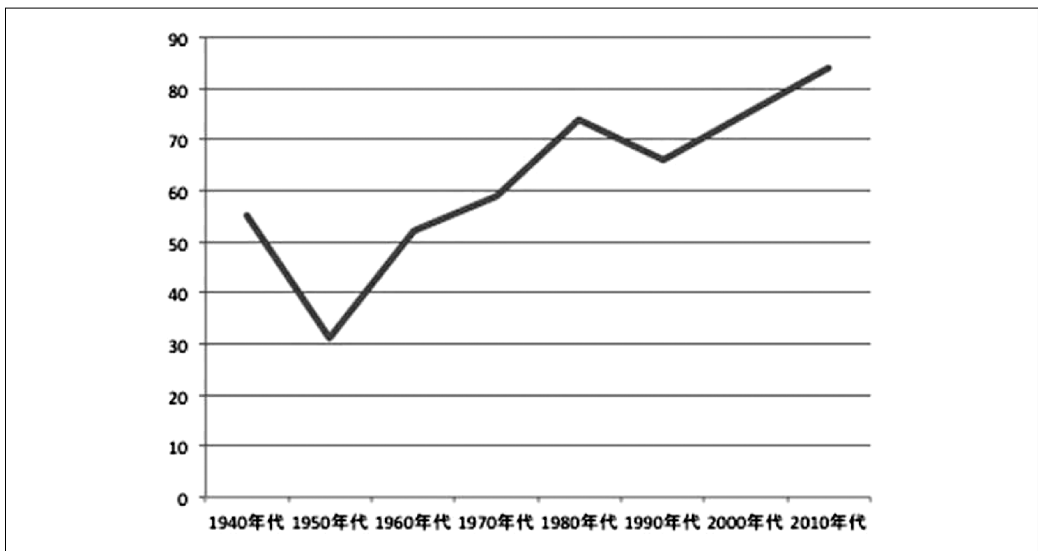


図2 10年ごとの全文掲載割合の平均値の変化

年ごとに全文掲載割合の変化を観察した。図2は、10年ごとにその期間に発行された教科書に掲載されている小説に関して、全文掲載の作品数の割合を出し、折れ線グラフにしている。縦軸には全文掲載の割合（％）をとり、横軸には10年ごとの年代をとった。

図2から、10年ごとの全文掲載割合の変化をみると、1940年代から1950年代において、その割合が55%から31%にまで減少している。しかし、1950年代から1980年代においては74%に増加している。1990年代に一度66%に減少するが、再び増加し、2010年代には84%になっている。

以上の分析から、全文掲載の割合は2014(平成26)年には85%であり、現在使用されている教科書に掲載されている多くの小説が全文掲載されているが、長い期間で見ると変化があり、1950年頃においては寧ろ一部抜粋での掲載が多かったことが分かった。

4. 作品に注目した分析

教科書に掲載されている小説には、長い期間、複数の教科書に掲載されているものが存在している。これらはいわゆる定番教材と呼ばれるものである。次の表2は、本稿で調査を行った教科書の中で、掲載冊数が多い上位11作品を、その掲載冊数及び掲載状況とともに表化したものである。

表2を見ると、掲載冊数が多い小説の中で、全文掲載のみで掲載されている作品は、中島敦『山月記』、芥川龍之介『羅生門』、志賀直哉『城の崎にて』、芥川龍之介『鼻』、井伏鱒二『山椒魚』、梶井基次郎『檸檬』の6作品であった。一方、一部抜粋でのみ掲載されている作品は、森鷗外『舞姫』、志賀直哉『暗夜行路』、樋口一葉『たけくらべ』の3作品であった。また全文掲載と一部抜粋での掲載の両方が見られた作品は、森鷗外『舞姫』と川端康成『伊豆の踊り子』の2作品であった。なお、森鷗外の『舞姫』に関しては、1984(昭和59)年に旺文社から発行された『高等学校 現代文』の一冊でのみ一部抜粋での掲載方法がとられており、他の20冊では全て全文掲載されていた。一方、川端康成の『伊豆の踊り子』に関しては、1955(昭和30)年から1969(昭和44)年までに発行された教科書4冊では一部抜粋で掲載されていたが、1975(昭和51)年に発行された教科書から全て全文掲載になっており、その冊数は5冊である。

以上から、定番教材化している小説は、多くの作品が全文掲載されていることが分かる。

表2 掲載冊数が多い小説上位11作品

作品名	作者	掲載冊数	掲載状況
山月記	中島敦	26冊	全文掲載のみ
舞姫	森鷗外	21冊	全文掲載/一部抜粋
こころ	夏目漱石	21冊	一部抜粋のみ
羅生門	芥川龍之介	15冊	全文掲載のみ
城の崎にて	志賀直哉	11冊	全文掲載のみ
鼻	芥川龍之介	11冊	全文掲載のみ
伊豆の踊り子	川端康成	9冊	全文掲載/一部抜粋
山椒魚	井伏鱒二	8冊	全文掲載のみ
檸檬	梶井基次郎	8冊	全文掲載のみ
暗夜行路	志賀直哉	7冊	一部抜粋のみ
たけくらべ	樋口一葉	7冊	一部抜粋のみ

5. 現在の教科書が抱える問題点の提示

ここまでの調査結果を改めてまとめると次の3点になる。

第一に、教科書における小説の掲載状況は、1940年代から2010年代にかけて、一部抜粋での掲載方法中心から、全文掲載での掲載方法中心へと変化してきた。

第二に、全文掲載されている小説の割合は経年変化を見ると、継続的に増加したのではなく、1990年代に一時減少したのち、再び増加の傾向に転じた。このような変化は10～20年程度の周期で傾向の変化をしたと考えられる。

第三に定番教材化している小説は、多くの作品が教科書に全文掲載されている。

以上の点を踏まえ、問題点を2点提示したい。

1点目は、長編作品の一部抜粋を読んだ際、その作品全体を読んだ場合と同じ学習ができるのかという点である。日本では、学習指導要領によって生徒の学習の方針が定められているため、教科書が学習指導要領から受けている影響は大きいことが予想される。このため、学習指導要領の記載を各改訂ごとに確認したところ、以下のような変化を読み取ることができた。

1960(昭和35)年の改訂では、現代国語の内容において、それ以前の学習指導要領では記載のなかった文章の主題・要旨の把握が記載された。主題・要旨の把握は1989(平成元年)の改訂まで内容の中に記載されているが、1999(平成11)年の改訂で、主題という言葉が記載されなくなった。一方で1978(昭和53)年の改訂より、文章の構成の把握が記載されるようになった。これは現行の学習指導要領においても記載されている。

ここで文章の主題や要旨について考えてみたい。主題や要旨といったものは文章全体を読み、把握していくものである。しかし教科書に掲載されている小説が一部抜粋であった場合、そこから読み取られる主題や要旨は、小説全文から読み取られる主題や要旨とは異なることが予想される。また文章の構成の理解に関しても、抜粋部分と小説全文では構成が異なっている場合がある。これらの違いから、生徒が小説の抜粋部分だけを読み作品に関して誤解をしてしまう可能性がある。

以上の点を考えると、長編作品の一部抜粋を読んだ際、その作品全体を読んだ場合と同じ学習になるのだろうか。この点についての調査研究が必要になる。

2点目は、教科書における小説の掲載方法が、全文掲載主流になることにより、教科書にとり上げられる作品や作者に偏りが生まれている点である。全体的な傾向を見たとき、図2の読み取りから分かるように、教科書における小説の全文掲載の割合は、増加傾向にあり、近年では80%以上の作品が全文掲載で掲載されている。また、表2で提示したように定番教材化している小説は、その多くが全文掲載されている。つまり、近年の教科書では、全文が掲載可能な分量の小説が多く掲載されており、一部抜粋で掲載されている小説は少なくなってきたことが分かる。

しかし、小説は教科書に掲載可能な分量の比較的短編のものだけではない。夏目漱石の『こころ』のような長編の作品も多数存在している。多様な作品の作風に触れることも読解力の育成には重要な要素となる。少ない分量で凝縮された世界を味わうことも、多くの分量で細やかに描か

れた世界を味わうことも経験として必要なことであろう。

また、多様な作品に触れるということは、多様な作者の作品に触れるということでもある。現状の教科書を見ると、例えば芥川龍之介のような短編小説を多数生み出した作家に触れる機会は多いものの、大岡昇平のような長編小説を多数生み出した作家に触れる機会は少なくなっている。芥川龍之介には彼にしか描けない世界があるが、同時に大岡昇平もまた、彼にしか描けない世界を持っている。国語という授業の時間を通して、生徒が触れることのできる作品が、短編の小説ばかりになることは、問題はないだろうか。この点についても究明が必要となる。

6. 本稿のまとめと課題

本稿では、教科書で抜粋された作品を読んだ場合、生徒が作品の理解に関して誤った理解をしてしまう可能性があるという問題意識に基づき、高等学校の教科書の調査より、現在の教科書が抱えている問題点を提示した。調査においては、各年の全文掲載の割合を観察し、また10年ごとの傾向の変化も観察した。この2つの観察から、教科書における小説の掲載状況は、1940年代から2010年代にかけて、一部抜粋での掲載方法中心から、全文掲載での掲載方法中心へと変化してきたことを明らかにした。しかし、この掲載方法の変化を、教育現場の状況や教科書作成段階の状況と関連づけて考察できていない。また、掲載方法に関わる今後究明すべきの課題として「全文を読んだ場合と抜粋を読んだ場合で同じような学習ができたといえるのか」と「長編の小説と短編の小説の両方に触れる必要はないのか」という二つをあげることができた。

ただし、本稿では掲載方法の歴史的変化については示すことができたものの、そのような変化がなぜ生じたのかを、教育現場の状況や実際の教科書編集の事情などを踏まえて考察することまでは至っていない。このような点についても今後の課題である。

参考文献等

- ・阿武泉(2008)「高等学校国語教科書における文学教材の傾向」『國文學 解釈と教材の研究』第53巻第13号、學燈社
- ・一般社団法人教科書協会(2016)『教科書発行の現状と課題』、教科書協会
- ・大平浩哉 他編(1992)『高等学校国語教育情報辞典』、大修館書店
- ・塚田泰彦(1974)「文学教育における小説教材化の視点について」東京教育大学教育学科卒業論文
- ・文部科学省(2006) 教員勤務実態調査(高等学校)報告書
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2011/07/05/1308071_2.pdf)

本稿は、筑波大学人文・文化学群日本語・日本文化学類2016年度卒業論文『国語教科書における小説の改編について—高等学校教科書における抜粋とその問題点—』より作成している。